

オルテガ著『大衆の反逆』の 邦訳遅滞の原因

— ナチス政権下でのドイツ語版の出版禁止を手掛かりとして —

小 山 義 博

1. 問題の所在

本稿では、オルテガ・イ・ガセットの『大衆の反逆』（西 1930：以下、『反逆』）が原書出版から23年後（1953年）に邦訳されたことについて、これを「遅滞」と捉えてその原因について検証する。森田次朗と相澤真一は、原書が翻訳される背景について次のように指摘する。翻訳作業には、原書執筆時と翻訳時、それぞれの社会的背景を考慮する必要があり、後者は「受容」の観点からも重要となる（森田・相澤 2017: 104）¹⁾

日本でのオルテガ受容の特徴は、まさに原書出版と同時期の1930年代初頭よりドイツ（語・哲学）経由で紹介・邦訳され続けてきたことが指摘されている。もちろん、邦訳『反逆』の底本もドイツ語版であり、原書出版と同時期にドイツをはじめヨーロッパ各国で翻訳された。つまりこの特徴に当てはめれば、日本でも同時期に邦訳する機会はある、23年待たれる必要はない。むしろ、邦訳者や先行研究では、歴史的な解釈を試みて邦訳自体を好意的に受け入れているため、遅滞と捉えてはいない。この点が、森田と相澤の指摘する翻訳国側の受容するにたる社会的背景との関連である。

こと、その代表作に限って邦訳が23年後ということについて、いくつか検討が必要である。まず、同時期に『反逆』を手取る機会があれば、邦訳をしなかったいわば「出し惜しみ」がなぜ生じたのか。つまり、森田と相澤のいう社会的背景（1930年代のスペインと日本）が邦訳に至る背景ではなかったのか。つぎに、邦訳時に両国の社会的背景（1930年のスペイン・1953年の日本）の類似を想起したのか（それも原語ではなくドイツ語から）。その際に、邦訳（受容）するにたる状況を予想できたのかなどである。むしろ、原書刊行国でヒットしている著作を同時期に翻訳すれば、受

容はより容易である。

そこで本稿では、次の流れで遅滞の原因を検証する。まず、文献を比較検討してひとつの仮説を示す。それは、ナチス政権下で『反逆』が出版されなかったことで、日本のオルテガ受容がドイツ経由を特徴としたからこそ、ドイツ語版『反逆』を入手できずに邦訳が遅れたということ。その際、ファシズム諸国と共産圏でのオルテガ受容の特徴と、『反逆』の翻訳出版をめぐる動向を概観する。それは、オルテガは『反逆』でファシズムとコミニズム（ボルシェビズム）を批判しているからである。よって、両陣営と日本での受容の背景、つまり社会情勢の観点で関連があるといえるのか検討する。

次に、池島重信に注目する。池島は『現代の課題』（西 1923：以下、『課題』）を邦訳し、短期間にさらに2回再版した。その都度、オルテガのほかの著作の邦訳をくわえ、訳者「序文」も書き直している。その過程に、『反逆』の著者としての認識や、池島が所有していたと考えられるオルテガの著作を検討し、同時期に『反逆』を邦訳する機会の是非を読み取る。

では、まずは『反逆』の概要、日本でのオルテガ受容の特徴、『反逆』の邦訳をめぐる動向を示す。そして、両陣営での翻訳の状況と日本での状況を比較して検証する。

2. 『大衆の反逆』について

オルテガは、自身が定義した人間類型の諸概念（大衆・大衆人・平均人）の誕生とその人間類型が社会にもたらす結果に警鐘を鳴らす。この人間類型は、自由主義的デモクラシーと科学技術の進歩によって誕生し、その恩恵を享受しながら政治や文化など日常生活のあらゆる側面に台頭して社会的権力を掌握した。オルテガはそのような現象を「大衆の反逆」と名付け、この人間類型が社会に直接働きかけてくることに警鐘を鳴らし、その典型がファシズムとコミニズム（ボルシェビズム）であった（Ortega [1930] 2010）。

オルテガが『反逆』で示した問題意識は、1922年以降主張し続けている内容である（Ortega [1930] 2010: 375）。出版後は、周辺国で同時期に翻訳された²⁾。だがのちにオルテガは、『反逆』で示した主張がすでに古い内容にもかかわらず、読まれ続けている（受容）ことに驚いている（Ortega [1937] 2010: 349; [1951] 2017: 350-1）。つまり、本人と読者との間には、

『反逆』をめぐる時間的な評価のズレがある。この点は、弟子のコラールも指摘する。つまり、『反逆』が有名になりすぎたために他の著作への注目が薄れ、オルテガ哲学の深層と関連を失ったのである (Díez del Corral 1962: 206-7)。そして、このズレが顕著な国が日本といえる³⁾。

3. 『大衆の反逆』の翻訳をめぐる各国の動向

3.1 日本におけるオルテガ受容の特徴の確認と『大衆の反逆』の邦訳をめぐる動向

樺俊雄と佐野利勝は1953年に、『反逆』をドイツ語版よりそれぞれ邦訳したが、すでに原書より23年の月日が経っている。拙稿で、日本のオルテガ受容が〈二重の間接的受容〉を特徴としていることを指摘した (小山 2019)。確認すると、まずオルテガ受容について先行研究では、1930年代初頭から原語ではなくドイツ経由が指摘された。それは、ドイツ哲学の隆盛とオルテガがドイツで評価されていたからであった (木下 2013a, 2013b; Tanaka 2007)。そして『反逆』が邦訳されてからのオルテガの評価は、哲学者としての評価から社会学者としての評価に変化した (Tanaka 2007: 117)。

しかし先行研究では、ドイツでのオルテガの評価やオルテガのドイツ訪問歴について深い言及はない。そもそも、ドイツでのオルテガ受容や著作がドイツ語訳された時期と、オルテガのドイツ訪問歴は合致しない。したがって、木下智統のいう第1期オルテガ受容が、ドイツ経由を特徴としながらも、その時期にはドイツにおいて本人不在 (間接的) の時期の受容が日本に反映されていた、という意味で〈二重の間接的受容〉であった (小山 2019)⁴⁾。確かに、C.ドミンゲスがオルテガ受容の伝播理由を三つ示したが、その一つにドイツは当てはまる⁵⁾。つまり、同時代のスペイン哲学界ではオルテガの功績が高く評価され、受容した国々でその評価が容易に印象付けられたのである。

さらに拙稿 (小山 2020) で、日本の社会学者がオルテガをどの様に捉えていたのかを1950年代に注目して明らかにした。その特徴は、大衆社会論のブームに関連して、1958年から始まる大衆社会論争ではなく、それ以前に紹介されていた輸入理論 (カタカタ大衆社会論) のひとつとして『反逆』は捉えられていた。この点が、翻訳国側の受容するにたる背景となる。

奥村家造は、オルテガの著作に限らず、原書が翻訳される際の遅滞は本質的な問題ではないと断っている。そして、翻訳する側・される側の両国に見られる歴史的背景の比較を行う是非を説く。まさに、森田次朗と相澤真一の指摘する点である。そして、『反逆』の内容が出版以前より踏襲されている内容であることを踏まえ、同一の主題を一貫して扱うことについて、歴史に対する反省の機縁を意味すると指摘する(奥村 1957: 360-2)。つまり、戦後日本の社会状況が、『反逆』で指摘された大衆社会そのものであり、内省的に検証が必要であると捉えることができる。しかし、それは直接的な遅滞の原因でもなく、まして戦後に『反逆』で指摘される時代が到来するとは予想できず、遅滞の理由が奥村自身の歴史的解釈に偏っている。

その一方で邦訳者の権俊雄と佐野利勝は、それぞれ訳者の「あとがき」で遅滞と捉えず、むしろ戦後の日本社会が『反逆』で指摘された様相を呈していると評価する(権 1953: 255-8; 佐野 1953: 265-70)。おおむね、オルテガの大衆概念を引用して質的な大衆が現れ、技術進歩も相まって量的な意味での文字通りの大衆社会が日本社会に到来したということである。さらに権は、オルテガの分析に炯眼さを感じている。つまり、オルテガがすでにファシズムと共産主義、ヨーロッパの統一、ヨーロッパとアメリカの関連、そして科学の専門主義の危機といった、今日(1953年)にも通じる諸問題に対処していたからである(権 1953: 257)。だがこの視点は、戦後日本社会の背景、つまり受容の点に必ずしも一致しない。

Tanakaは、上記権の「訳者あとがき」部分を引用し、邦訳するにたる理由と位置付けている。その際、邦訳『反逆』の遅滞について、作品自体に価値が無いのではないと断りを入れている(Tanaka 2007: 114)⁶⁾。しかし、権は邦訳を遅滞と捉えていないため、「価値が無いことではない」(＝価値がある)ならば、邦訳が遅れる必要もない。また権は、邦訳にあたって西村勝彦に協力を求めている。西村は、オルテガをル・ボンと同系に位置付け『反逆』を引用し、大衆批判は選良理論と結びつきファシズムを擁護するものとして昇華する(西村 1958: 47-9)と指摘する。

確かに、ファランヘ党創設者のJ.アントニオも、オルテガが『無脊椎のスペイン』(西 1922: 以下、『無脊椎』)と『反逆』で展開したエリート理論に影響を受けていた(Tzvi Medin 2014: 272)。しかし本来の内容は、社会的権力を掌握した大衆による直接行動の帰結としてのファシズム批判で

ある。そのため、ファシズム体制から捉えれば、自らの誕生を批判していることになる。したがって、訳者の捉え方にも検討の余地がある⁷⁾。木下も樺の「訳者あとがき」を引用しながら、日本の社会情勢がオルテガ思想の受容へと結びついた(木下 2013a: 95-6)と指摘する。しかし、それは邦訳遅滞の直接的な原因ではなく、その点について木下は言及していない。

もちろん樺は、1930年代よりオルテガについて言及してきたからこそ、『反逆』を邦訳したといえる。だが、大衆(社会)論の観点からオルテガを捉えるのは、邦訳する時期になってからであった(小山 2020: 55-7, 59)。

以上のように、まず『反逆』をめぐるのは、本人と受容国との間に時間的な評価のズレがあった。こと邦訳者たちは、歴史的背景から邦訳『反逆』の出版を好意・肯定的に捉えていた。そして、先行研究を含め歴史的な解釈から分析し、邦訳するにたる状況と捉え、遅滞の直接的な原因には触れていない。その社会的背景は、拙稿(小山 2020)を含め、戦後の大衆(社会・論)化の観点であった。

3.2 ファシズム諸国と共産圏での『大衆の反逆』をめぐる動向と受容

次の文献を手掛かりとして、各国での『反逆』をめぐる動向と翻訳されるまでの受容を概観し、『反逆』を翻訳する土壌がすでに形成されていたことを指摘する。そこから、邦訳遅滞の遠因を探るとする。対象とする国は『反逆』に従い、ファシズム諸国(ドイツ・イタリア・スペイン)と共産主義諸国(ロシア・ポーランド・ハンガリー)とする。

E.メレガリは、非スペイン語圏でのオルテガ受容について、ドイツ、フランス、アメリカ、イタリアを中心にその特徴をまとめている(Franco Meregalli 1984, 1985)。S.ブランコは、ドイツに絞ってオルテガ受容の特徴を示している(Francisco Sánchez-Blanco 1984)。U.ルクセールは、世界各国で翻訳出版されたオルテガの著作と、オルテガにかんする研究論文を国別に文献目録としてまとめている(Udo Rukser 1971)⁸⁾。

3.2.1 ファシズム諸国

E.メレガリは、『反逆』はナチス政権下で出版されなかったと指摘する(Meregalli 1984: 448, 1985: 146)が、出典が無い。可能性として、U.ルクセールの文献目録があげられる。そのドイツの項目には、ナチス政権下(1933年～1945年)の間に『反逆』が出版された記載がない(Rukser 1971:

20-2) ため⁹⁾、そこから読み取っているといえる。だがF.メレガリは続けて、イタリアでもファシズム体制ゆえに、『反逆』は翻訳されていないと指摘する (Meregalli 1984: 448, 1985: 149)。よって、翻訳は1945年である (Rukser 1971: 295)。

つまり、『反逆』の内容がファシズム批判であったために、両国では前述の西村の指摘とは捉えず、大衆扇動を利用した自らの政治体制への批判の書として、文字通り出版されなかったといえる。もちろん本国スペインでも、1936年から始まる内戦以降はファシズム体制ゆえに出版されず、再販は1943年である。

こうしたファシズム諸国での出版の差止めは、R.オリンジャーが指摘するように、『無脊椎』がアメリカ(1937年)で「ファシズムについて」(西 1925年)が付され翻訳されるきっかけとなった (Nelson R. Orringer 1983: 149)。F.メレガリは、アメリカで『反逆』が翻訳出版された際の新聞書評を紹介する。

新著『反逆』は〔ワイマール政権からナチス政権という〕ドイツの革命を考慮し、その推移をオルテガは予言したものと考えられる。したがってこのことは、『反逆』はドイツで発売当時ベストセラーであったが、ナチスが政権を取ってから出版が禁止される理由となりえるであろう。(Meregalli 1985: 160, New York Times 1933「Authors today and yesterday」欄)。

この書評からは、ナチス政権下で『反逆』がやはり出版されなかった可能性が伺える。

一方スペインでは、J.マリアスが指摘するように、『反逆』は誤読された。すなわち、オルテガは『反逆』第1章で政治的な意味はないと留意した。だが、当時のスペイン社会の時局は、すべてが政治的に語られる状況下であったために、出版当初から政治的に読み継がれてしまった。したがって、「フランス人への序文」第4章で政治的な意味合いがないことを、改めて強調せざるを得なかった (Julián Marías [1975] 1982: 633-5)。まさに、政治的な観点から本国含めてドイツとイタリアで出版されなかった。したがって、日本のオルテガ受容がドイツ経由を特徴としたからこそ、ドイツ語版『反逆』を入手できずに邦訳が遅れたと考えることができ

る。

しかしその一方で、S.ブランコはE.R.クルティウスを引用しながら、『反逆』がナチス政権下においても出版されていたことを示唆している。その引用は、ドイツにおけるオルテガ作品の検閲 (censura) についてである。検閲は内容を少し削除したのみで、出版自体は継続していた (Sánchez-Blanco 1984: 55)。確かにクルティウスは、オルテガ作品の再版について言及している。それは、第2次大戦の期間を含めてオルテガのいくつかの著作がドイツで再版されていたこと、そして、再版された著作を原書とドイツ語版の初版と比較すると、文章が削除された部分があることが分かる (Curtius 1949 = [1952] 2019: 13) と指摘する。だが、ここでクルティウスは「検閲」(censura) という言葉ではなく、「削除」(eliminar) という言葉を使っている。よって、政治的な意図ではなく、ドイツの読者に合わせた意識といえる¹⁰⁾。さらに、再版された著作名については言及していないため、『反逆』とは限らない。したがって、S.ブランコの指摘も示唆にとどまるし、邦訳者らの底本が重要となる。

樺 (西村) と佐野はともにドイツ語版の初版本 (1931年) を底本としている (樺 1953: 258; 佐野 1953: 265)。つまり、S.ブランコが示唆するように、ナチス政権下でも流通していた可能性もある。それは、ドイツ語版『反逆』の再版は邦訳より遅い1956年だからである。樺 (西村) と佐野は、ドイツ語版『反逆』をどのように入手したのか記していないが、『反逆』の著者としてのオルテガに言及してこなかったことは、邦訳間近に古書で入手したと考えられる。

ドイツでのオルテガ受容には、クルティウスと訳者のH.ヴァイルが貢献した。クルティウスは、1920年代中盤よりドイツでオルテガについて西欧評論社の創設者として紹介し、『無脊椎』と『課題』について言及し、スペインとドイツの社会の類似を垣間見る (Meregalli 1985: 142; Sánchez-Blanco 1984: 50)¹¹⁾。F.メレガリはクルティウスによる紹介を、スペイン以外でのオルテガ受容に決定的であったと指摘した。そして、1920年代後半に関連書籍が出版されたことで、ドイツにおいてオルテガがスペインを象徴する重要な要素になったと強調する (Meregalli 1985: 142, 144)。このように、オルテガの著作が翻訳される前から複数の研究者によって紹介されたことで土壌ができ、1930年に『課題』、1931年に『反逆』が翻訳された。

イタリアでは、L.ギゾーが1932年にオルテガについて扱った論文を発表し、オルテガ思想を広めた。もちろん、『反逆』出版以前よりファシズム体制のため、オルテガは「大衆の反逆」の表現者として特定されていた(Meregalli 1984: 445-6, 448)¹²⁾。

3.2.2 共産圏

『反逆』は共産主義諸国でも、イデオロギーの観点から出版されていないことが読み取れる。ソ連ロシアでオルテガの著作は、『芸術の非人間化』(西 1925年、ソ 1957年)のみ翻訳されている(Meregalli 1984: 448; Rukser 1971: 381)。また、本格的な受容そのものが、1958年になってようやくフランス経由で紹介されている(Zdenek Kourim 1983: 97)。

ポーランドでは戦後共産主義陣営になった際に、D.レスチェナ(Dorota Leszczyna)が指摘するように、『反逆』の内容に警戒感があった。それは、1920年代に2冊が翻訳されていたとはいえ、『反逆』が体制の支柱であるマルクス主義と共産主義を批判しているため、当局の不安を駆りたてたことで、ポーランド国内でのオルテガ作品の伝搬を好まず、1970年代までオルテガ研究は盛んではなかった。したがって、『反逆』の翻訳は1982年になってからである(Leszczyna 2015: 127-8)。

ハンガリーでも状況は同じであった。D.チェイテイ(Dezso Csejtei)によると、1930年代初頭にはすでに『反逆』の書評と翻訳(1938年)はされていた。だが、戦後共産主義陣営になった際にはオルテガ研究者は迫害を受け¹³⁾、80年代までオルテガ研究の再来を待たなければならなかった(Csejtei 2008: 55, 60-1, 72)。

3.2.3 まとめ

以上のように、文献を検討して総合的に判断すると、ファシズム諸国と共産主義諸国ではイデオロギーの観点から『反逆』が出版されなかった。それは、自らの政治体制、また、大衆扇動によるその成立過程を批判しているからである。イタリアでは、『反逆』出版以前よりファシズム体制のため、1945年まで待たれた理由も理解できる。スペインとドイツでも流通していたが、体制の変更以降出版されなかったことは、政治体制と関係があるといえる。

一方受容の面では、オルテガが同時代の哲学者ということもあり、著作

が翻訳される前から紹介されていた。これは、C.ドミンゲスの指摘とも相違ない。つまり、『反逆』を翻訳する土壌がすでに形成されていたのである。この点は日本にも当てはまるが、『反逆』の邦訳は遅れた¹⁴⁾。では、日本で『反逆』以外の著作の邦訳の経緯に、『反逆』の邦訳が遅れた要因を探るとする。

4. ほかの著作の邦訳をめぐる動向：池島重信を中心に

第1期オルテガ受容の特徴は、『課題』の扱いが中心である。池島重信は1937年に『課題』を邦訳し、1941年までにさらに2回再版した。その都度、オルテガのほかの著作の邦訳を付けくわえ、訳者「序文」も書き直している¹⁵⁾。その過程に『反逆』の著者としての認識と、同時期に邦訳する機会の是非を検討し、ドイツでの状況との関連を読み取る。

4.1 池島に見る『現代の課題』の認識

オルテガは『課題』で、主要概念のひとつである〈生の理性〉を示した¹⁶⁾。特に、第1期オルテガ受容の特徴は、哲学者によって『課題』を対象に邦訳以前から考察されていた。木下智統とSatoko Tanakaは、桑木巖翼と池島による功績を評価し(木下 2012; Tanaka 2007)、木下は、特に池島を日本におけるオルテガ受容の中心人物と位置付けている。それは、池島がオルテガについて継続的に言及していたことと、オルテガの訃報に際して寄稿したこと由来する(木下 2012: 134)。

池島は1版目「序文」で、『課題』を「流行の書」・「未来の書」と評した。それは、時代感覚への合致と、そうした時代への峻厳な態度、つまり、同時代が抱える問題に対して“問い”をオルテガが提示したことにあつた(池島 1937a: 2-3; 1937b: 28)。Tanakaは、ひとつの作品が短期間に再版されたことについて、当時の日本の社会情勢に関連づけ歴史的な解釈を行う。つまり、オルテガが抱いた生と理性に垣間見る問題意識に池島が共感を持ち、軍国主義の時代に呼応して同様の問題意識を感じ、出版に値する背景であつた(Tanaka 2007: 110-2)。

確かに、日本の社会学史の観点からも、戦前に社会学は社会主義と関連付けられ誤解されていたことは通説である。だがこの時期は、『反逆』ではなく『課題』への注目であり、Tanakaによる軍国主義の指摘も『課題』に対してである。さらに西村の誤読から判断するに、戦前の日本政府が

『反逆』をドイツと同じように、自らの政治体制、大衆扇動によるその成立過程を批判した書籍として読解し、イデオロギーの観点から出版させなかったことは検討の余地がある。むしろ拙稿で指摘したように、社会学(者)経由でのオルテガ受容は、戦後に大衆社会論の観点から『反逆』を捉える内容であった。

池島の3版目「序文」に、大部分は1版目「序文」の流用であるが、「流行の書」や「未来の書」という記載はない(池島 1941)。また、池島が付け足したオルテガの著作は、ドイツ語版『課題』にもともと含まれていた¹⁷⁾。したがって、池島が底本にした『課題』に含まれている他の著作を読み、それらを訳す試みは自然な行為と言え、付け足すことに社会情勢は関係なく、池島もそのような説明はしていない。むしろアメリカでは、前述のように、社会情勢を考慮して直接的な題名(「ファシズムについて」)の論文が付けくわえられていた。

その一方で、堀秀彦が同時期に『愛についての省察』(西 1941: 以下、『省察』)をドイツ語版(1933年)から邦訳(1940年)した。だが、底本は池島から借りており、オルテガについて深い言及はない(堀 1940: 4-6)。つまり、池島が所有していたオルテガの著作に注目される。だが、付け足した「知性の改造」(Reforma de la Inteligencia 西 1926; 独 1932)はドイツ語版『課題』に含まれていない。その一方で、含まれている「アトランティードス」(Las Atrantidas 西 1924; 独 1928)は邦訳されていない。したがって、「知性の改造」を別に所有していたことになる。さらに2版目「序文」では、オルテガが政治に関心を示しながらも、『反逆』の発表のみで政治の分野から退いたことを紹介している(池島 1938: 3)。つまり、池島は自ら『反逆』を邦訳する機会はなかったが、1938年時点で『反逆』の著者という認識は持っていた。よって池島は『反逆』、『観想家の書』¹⁸⁾、『省察』、そして『課題』のドイツ語版があることを認識していた¹⁹⁾。だが、オルテガ思想を体現した著作としては、『反逆』ではなく『課題』に位置付けている(池島 1937b: 28)。

4.2 池島に見る『大衆の反逆』の認識

池島は2版目「序文」でオルテガを『反逆』の著者として認識していたが、内容には触れていなかった。よって、池島が『反逆』を実際に読んだのか、あるいはドイツ語版を所有していたかは判断できない。だが、別稿

で『反逆』の内容に少し触れ、歴史的・時局を考察した哲学的裏付けをともなった文明批評の書と評した(池島 1937b: 28)。となると、周辺国で同時期に翻訳された『反逆』を、なぜ邦訳ではなく紹介にとどまったのかについては、ふたつ考えられる。

まず、やはりドイツ語版『反逆』を入手できずに、書評を手掛かりとしたこと。次に、池島の専門が哲学であったことである。前者については、F.メレガリの指摘が判断材料となる。それは、ドイツ語版『反逆』の出版直前に、その抄本と書評が雑誌に掲載された(Meregalli 1985: 145-6)。さらに、U.ルクセールの文献目録のドイツの項目にも、『反逆』の書評(1929年)と抄本(1932年)が確認できる(Udo Rukser 1971: 20, 29)²⁰⁾。つまり、内容を知る手段としてよっつの経路が考えられる。池島がこれらの雑誌を入手していれば、ドイツ語版『反逆』を入手していなくても、概要が分かる可能性があった。そのように考えれば、池島が『反逆』を邦訳しなかった(できなかつた)ことも想定できる。

確かに、書籍そのものではなく、掲載された雑誌を入手する方が困難かもしれない。だが、桑木がオルテガを最初に知った経緯が新聞の書評であった(桑木 1936: 298)ことを考えれば、池島も同様に雑誌経由の可能性も考えられる。さらに、池島よりも早い時期にオルテガを『反逆』の著者として捉えていた人物もいた²¹⁾。その内容も、とある書評を読んだことと判断できる。

ふたつ目の池島の専門が哲学であったことについては、1930年代を中心とした先行研究の指摘によるところであった。よって池島は、邦訳『反逆』が広く読まれていると認めながらも、『課題』をオルテガの主著として位置付けていた(池島 1954: 20-1)。さらに、新聞に寄稿したオルテガ訃報記事も、『課題』を邦訳した理由についてであった²²⁾。つまり池島にとってのオルテガは、文明批評家ではなく哲学者であったため、池島は『反逆』についてあえて文明批評としての言及をしてこなかったといえる。

以上のように、池島は『課題』を邦訳する同時期には、すでにオルテガを『反逆』の著者として認識し、少し内容を紹介していた。だが、邦訳に至らなかったのは、やはりドイツ語版『反逆』を入手できなかったことが考えられる。そして、自身が哲学を専門としていたために、哲学者としてのオルテガの著作(『課題』)に注目していたと判断できる。

5. おわりに

以上のように本稿では、『反逆』の邦訳を遅滞と捉え、その原因について仮説を示した。そこで、邦訳遅滞がファシズム諸国・共産主義諸国での社会的背景との関連と、言説から『反逆』への認識と同時期（1930年代）での邦訳する機会を探った。結論としては、その仮説の通りで合点が多く。つまり、ナチス政権下で『反逆』が出版されなかったことで、日本のオルテガ受容がドイツ経由を特徴としたからこそ、邦訳者たちがドイツ語版『反逆』を入手できずに邦訳が遅れたのであった。だが、『反逆』に対する意味合いは異なっていた。ファシズム体制諸国ではイデオロギー的側面、日本では大衆社会論の一論者、かつ邦訳者・先行研究者の理解では戦後復興期の大衆（社会）化に位置付けられていた。よって、邦訳は好意的に受けとめられていた。池島については、自身が哲学を専門としていたがゆえに、哲学者としてのオルテガへの注目が目立ち、『反逆』の文明論的意義についてあまり言及してこなかった。

今回「仮説」とする理由については、現段階で確実な史資料がなく、文献を比較した総合的な判断に過ぎないからである。邦訳『反逆』の遅滞について、今後の確実な史資料の発見を期待しつつ、現段階における根拠ある仮説として示した。

注

- 1) 森田次朗と相澤真一は、P.ブルデュエの『ディスタンクシオン』について、日本での受容を紹介している。
- 2) 『反逆』が同時期に翻訳された国々は次の通りである。ドイツ（1931年）、イギリス・アメリカ（1932年）、チェコ・オランダ（1933年）、ノルウェー・スウェーデン（1934年）、フランス（1937年）、ハンガリー（1938年）、イタリア（1945年）である（Meregalli 1984: 448）。
- 3) オルテガは『反逆』の内容に古さを感じたが、弟子のコラールによると、〔23年遅れた〕邦訳『反逆』を受け取り、満足げに披露した（Diez del Corral 1962: 174）。
- 4) 木下智統は日本のオルテガ受容の時期をよっつに分けた。第1期は、1933年の導入からオルテガが亡くなる1955年まで。第2期は、1956年からA. マタイスが『ウナムーノ、オルテガ研究』を出版した1975年、第3期が1976年か

ら「スペインイヤー」と言われた1992年まで。そして第4期が1993年から現在までである(木下 2013b: 70)。一方でオルテガのドイツ訪問歴は、留学(1905年～1907年、1911年)と旅行(1934年)、そして講演会(1949年～1954年)である。つまり第1期の間では、後半5年程度しか重ならない。だが、本人の不在にもかかわらず、この期間にドイツで翻訳出版された著作は1927年から1955年にかけて75作品である(Rukser 1971: 19-25)。

- 5) ほかの二つは、オルテガ自身が訪問した国々で自らの思想を展開したこと、そして、オルテガ自身や弟子らがスペイン内戦にともなう亡命によって、その先々の国々で自らオルテガ研究に貢献したことである(Chamizo Dominguez 2002: 157-8)。確かに、オルテガはドイツ各地の大学で講演会を行っているため、直接訪問に当てはまる。だが晩年(脚注4参照)のため、日本のオルテガ受容を考慮すると、本稿であげた理由に当てはめるのが適切である。この点からも、日本のオルテガ受容がドイツでの間接的な受容を受け入れているのが分かる。
- 6) Satoko Tanaka自身は戦後の日本社会を朝鮮特需による成長に見て取り、その特徴を第1章の、人々の量的拡大(「充満」の事実)になぞらえている(Tanaka 2007: 115)。
- 7) 西村勝彦が指摘した選良理論との関係は、オルテガを含めた諸理論(パレート、ミヘルス、モスカなど)に対してである(西村 1958: 47-9)。しかし、オルテガについては誤読である。
- 8) この文献目録には、世界40ヶ国で翻訳されたオルテガの著作(A群)とオルテガにかんする研究論文・紹介文・書評など(B群)で構成されている。文献収集にあたっては、各国の研究者に依頼している。日本での収集は、A. マタイス(上智大学)が担当した。対象地域はヨーロッパ21ヶ国(大陸・旧ソ連・北欧)、アメリカ大陸16ヶ国(南米・北米)、そして、インド・日本・南アフリカである。もちろん、各国によってオルテガ作品の出版・研究の量は異なり、掲載されている最終の発表年も異なる。
- 9) ドイツでの再販は1956年で、初版と同じ訳者である。以降、57年58年60年63年に出版されている(Rukser 1971: 19, 25-7)。
- 10) このクルティウスの論文はスペイン語訳のため、「検閲」か「削除」かは訳者に依存する。だが、「削除された部分」を直訳すると、「初版でドイツ人を楽しませなかったいくつかの記述」と記している。
- 11) 特にS. ブランコはクルティウスによる紹介について、オルテガが指摘した

スペインの没落とその虚脱状態の分析を、1920年代のドイツの民主主義の状況になぞらえていたと紹介する。つまり、森田と相澤の指摘が、同時代に考慮されていたということである。

- 12) F.メレガリは、イタリアで『反逆』の翻訳が遅れたことについて、政治的な原因だけではないと指摘する。つまり、イタリアで検閲はそこまで厳しくはなく、オルテガについての論文を執筆できたし、実際にF.メレガリ自身がそれらの論文をフランコ体制下初頭にスペイン語訳もしている。むしろイタリアの哲学界で、新ヘーゲル主義（新観念論: Neoidealismo）が台頭していたことをあげている (Meregalli 1984: 448)。
- 13) D.チェイテイは7名のオルテガ研究者が迫害されたと指摘する。暗殺2名、出国2名、政治亡命3名である (Csejtei 2008: 72)。このうち、暗殺されたGábor Halasz、亡命したLászlo NémethとBéla Hamvasの3人は、U.ルクセルの目録でも論文発表者として確認できる (Rukser 1971: 277-80)。
- 14) 前田啓作は、邦訳『反逆』が第2次世界大戦前から何種類か出版されていたと指摘する。続けて、ドイツをはじめ各国で翻訳されている一方で、日本ではさほど反響を呼んでいないことに、日本の思想界の不毛さを憂いている (前田 1970: 359)。もちろん、U.ルクセル (1971: 305) の文献目録には、1953年以前に邦訳出版された記録はない。筆者も、樺俊雄と佐野利勝以前に邦訳が出版されたという確認は取れていない。また前田は、1950年代に社会学者によって反響があったことも見逃している。

Tanakaも前田の見解を示しているが賛否は避け、ふたつ指摘する。まず、『岩波哲学辞典』(1950年)がオルテガの邦訳について、池島訳の『課題』のみを紹介していたこと、そして、奥村が『反逆』の最初の邦訳について、〔戦前ではなく〕樺訳を紹介したことである (Tanaka 2007: 114)。もちろん奥村は、佐野訳も記載している (奥村 1957: 64)。
- 15) 池島重信はそれぞれ題名を変えて邦訳出版しており、1937年は『課題』、翌38年は『現代文化学序説』、そして1941年は『現代の課題 評論集 補』である。今回はオルテガの『課題』の内容そのものではなく、訳者序文に言及するため、本文では便宜上1版目、2版目、3版目と記す。
- 16) オルテガは「生の哲学」に影響を受けているが、〈生の理性〉はそれを独自に発展させた概念である。人間は自らの“生 (vida)”を、取り巻いている環境・歴史などあらゆる可能性のなかで選択・決断して生を構築していくという考え方である。

- 17) ドイツ語版『課題』には、「芸術の非人間化・小説の考察」、「アトランティードス」、そしてクルティウスによる解説が編纂されていた (Fudación José Ortega y Gasset 2009: 1429)。池島は1版目に「知性の改造」とクルティウスの解説、2版目に「芸術の非人間化・小説の考察」、そして過不足なく踏襲して3版目に「額縁」をさらにくわえた。3版目は、1968年に新装版として再版されている。それぞれの「序文」で、ほかの著作を付け足した経緯については触れていない。
- 18) 池島は『観想家の書』を著作集の表題と捉えている。池島は編纂されている著作について、ゲーテやカント、ヘーゲルにかんする論稿、そして「生命・心霊・精神」はハイデガーに通ずる思想 (池島 1937b: 28) と紹介した。この「生命・心霊・精神」は、『傍観者 第5巻』(西 1927年) に編纂されている。
- 19) ドイツでは、1933年に『省察』、34年に『傍観者』、37年に『無脊椎』が翻訳されている (Meregalli 1985: 146)。3版目に付けくわえた「額縁」も、すでに1933年にドイツ語訳されている (Rukser 1971: 20)。つまり、池島はこれらの著作の入手、あるいは認識が可能であった。
- 20) 書評の発表年から判断するに、執筆者は新聞連載時に読んでいたと考えられる。
- 21) 加藤朝鳥 (1886-1938: 翻訳・評論家) は、すでに1933年にオルテガを『反逆』の著者として認識し、書評を通して垣間見たと判断できる。その自著『最新思潮展望』のなかで、「群衆の反逆—西班牙の一見識ホセ・オルテガ」と題してオルテガの経歴に触れ、現代スペインの政治家・文学者・哲学者・スペイン革命の体験者と紹介し、写真も掲載した。管見の限り、日本のオルテガ受容の導入年でありながら、その姿が紹介された。
そして『反逆』第1章、人間を社会階級ではなく「質」の観点から少数者と大衆に分類する説明となる。加藤は、それぞれ小群衆 (少数者) と大群衆 (大衆) と表現するが、その概念を的確に捉えている。そして、アメリカの評論家を援用して、『反逆』を現代文明が抱える問題点について『西洋の没落』以上に分析していると紹介し、その理論や検討の綿密さ、明瞭な文体を評価した (加藤 1933: 196-202)。つまり加藤は、原語ではなく、アメリカのとある評論家の論説を通して知ったと考えられる。

先行研究では、加藤に言及はない。今回、辻井正衛の「日本におけるイス

パニヤ文学文献 追補」(1967)に加藤の著作が確認できた。

22) 池島は『課題』を邦訳した理由について、日本とスペインのヨーロッパ文化に対する精神的な距離感と現代に対する考察の深さをあげた(池島 1955)。

文 献

Chamizo Domínguez, Pedro José, 2002, *Ortega y la Cultura Española*, Madrid: Ediciones Pedagógicas.

Csejtei, Dezso, 2008, “La Presencia de Ortega y Gasset en Hungría entre 1928 y 1945,” *Revista de Hispanismo Filosófico*, 13: 53-74.

Curtius, Ernst Robert, 1949=[1952]2019, “Alemania y el Pensamiento Español Actual,” *Cuadernos Hispanoamericanos (Biblioteca Virtual Miguel de Cervantes)*, 28: 3-20.

Díez del Corral, Luis, 1962, “Vida y Sociedad en la Filosofía de Ortega y Gasset,” *Rekishì no Unmei to Shinpo (Destino Histórico y Progreso)*, Tokio: Editorial Miraisha (神吉敬三訳, 1962, 「オルテガ哲学における生と社会」小島威彦・鈴木成高訳『歴史の運命と進歩』未来社, 173-215.)

Fundación José Ortega y Gasset, 2009, “Notas a la Edición: Prólogo para Alemanes,” Fundación José Ortega y Gasset ed., *Obras Completas de José Ortega y Gasset Tomo 9*, España: Fundación José Ortega y Gasset, 1429-1432.

堀 秀彦, 1940, 「訳者序」『愛についての省察』実業之日本社, 4-6.

池島重信, 1937a, 「序」『現代の課題』刀江書院, 1-4.

———, 1937b, 「西班牙の思想家オルテガ」『ペン』三笠書房, 2(1): 27-28.

———, 1938, 「訳者序」『現代文化学序説 現代思想全書 第15巻』三笠書房, 1-4.

———, 1941, 「はしがき」『現代の課題 評論集 補』実業之日本社, ページ数未掲載.

———, 1954, 「オールテガ」『理想』253: 19-21.

———, 1955, 「“現代の賢者”オルテガの死」朝日新聞, 10月20日朝刊.

樺 俊雄, 1953, 「訳者あとがき」『大衆の蜂起』創元社, 255-8.

加藤朝鳥, 1933, 『最新思潮展望』暁書院.

木下智統, 2012, 「日本におけるオルテガ思想の初期受容—その過程と要因に関する一考察」『金城学院大学論集 社会科学編』9(1): 130-139.

———, 2013a, 「日本におけるオルテガ研究の進展」『金城学院大学論集 社会

- 科学編』9(2): 94-101.
- , 2013b, 「日本における初期オルテガ思想受容の展開と特質」『金城学院大学論集 社会科学編』10(1): 69-77.
- Kourim, Zdenek, 1983, “Ortega y Orteguismo: un Tema Actual de la Crítica Soviética,” *Antonio Heredia Soriano ed., Actas del III Seminario de Historia de la Filosofía Española: Salamanca, del 27 de Septiembre al 1.º de Octubre de 1982, Salamanca: Ediciones Universidad de Salamanca*, 97-113.
- 小山義博, 2019, 「オルテガ・イ・ガセットに会った日本人・小島威彦、その人に見るオルテガ受容一娘の証言を手掛かりとして」『社会学史研究』41 日本社会学史学会: 97-117.
- , 2020, 「日本の社会学者が捉えたオルテガ・イ・ガセットの特徴—1950年代、大衆社会論との関連で」『社会学論叢』日本大学社会学会, 197: 47-66.
- 桑木巖翼, [1936]1948, 「西班牙の思想家ホセ・オルテガ・イ・ガゼット」『倫理学の根本問題5版』理想社: 297-316.
- Leszczyna, Dorota, 2015, “La Recepción de la Obra de José Ortega y Gasset en Polonia,” *Revista de Estudios Orteguianos*, 30: 127-134.
- 前田啓作, 1970, 「解説」『オルテガ著作集4』白水社: 357-64.
- Marías, Julián, [1975]1982, “Introducción a la Rebelión de las Masas,” *Revista de Occidente ed., Obras de Julián Marías 9*, Madrid: Revista de Occidente, 633-649.
- Medin, Tzvi, 2014, *Entre la Veneración y el Olvido: La Recepción de Ortega y Gasset en España 1(1908-1936)*, Madrid: Editorial Biblioteca Nueva.
- Meregalli, Franco, 1984, “Ortega en Italia,” *Cuadernos Hispanoamericanos: Ejemplar Dedicado a Homenaje a José Ortega y Gasset*, 403-405: 445-466.
- , 1985, “Recepción de la Obra de Ortega fuera del Mundo Hispanohablante,” *Revista de Occidente: Ejemplar Dedicado a Presencia de Ortega: Joaquín Costa-José Ortega y Gasset: Tres Cartas Inéditas*, 48-49: 135-160.
- 森田次朗・相澤真一, 2017, 「『文化・階級・卓越化』を読む—社会調査の方法として蘇り、更新されるブルデュー」『中京大学現代社会学部紀要』11(1): 103-138.
- 西村勝彦, 1958, 『大衆社会論』誠信書房.
- 奥村家造, 1957, 「Critique of Vital Reasonの一側面—ホセ・オルテガ・イ・ガ

セットに関する覚書』『立命館文學』144：360-376.

Orringer, Nelson R., 1983, “La Presencia de Ortega y Gasset en los Estados Unidos,” Antonio Heredia Soriano ed., *Actas del III Seminario de Historia de la Filosofía Española: Salamanca, del 27 de Septiembre al 1.º de Octubre de 1982*, Salamanca: Ediciones Universidad de Salamanca, 147-157.

Ortega y Gasset, José, [1930]2010, “La Rebelión de las Masas,” Fundación José Ortega y Gasset ed., *Obras Completas de José Ortega y Gasset Tomo 4*, España: Fundación José Ortega y Gasset, 349-528.

———, [1937]2010, “Prólogo para Franceses,” Fundación José Ortega y Gasset ed., *Obras Completas de José Ortega y Gasset Tomo 4*, España: Fundación José Ortega y Gasset, 349-372.

———, [1951]2017, “Sobre la Rebelión de las Masas,” Fundación José Ortega y Gasset ed., *Obras Completas de José Ortega y Gasset Tomo 10*, España: Fundación José Ortega y Gasset, 349-356.

Rukser, Udo, 1971, *Bibliografía de Ortega*, Madrid: Revista de Occidente.

Sánchez-Blanco, Francisco, 1984, “Ortega y el Progresismo Liberal en Alemania entre las Dos Guerras Mundiales,” *Boletín de la Asociación Europea de Profesores de Español Año XVI*, 31: 49-56.

佐野利勝, 1953, 「訳者後記」『大衆の叛逆』筑摩書房, 265-70.

Tanaka, Satoko, 2007, “La Recepción de la Obra de Ortega en Japón,” *Revista de Estudios Orteguianos*, 14-15: 105-123.